

ちっちなおもい

サツ、サツ、サツ

オレンジ色の夕日の中、ひとつ音がするたびに、目の前がすっ、ときれいになる。

サツ、サツ、サツ

ほっきの音は、すこし好き。

「おっそおっじポ〜ポ、おっそおっじポ〜ポ」

音にあわせて歌ってくれる声は、もっと好き。

「ひかり、もっとポポ。もっとシャツシャツ、つてするポポ」

ふふ。ポシエツトから見上げてる笑顔を見ていると、私も自然に同じ顔になるみたい。

「ひ〜かり、ひ〜かり」

はいはい、わかったわ。この辺はきれいになっちゃったから、ええと

「お〜い、ひかりい〜。そろそろ、中のほう手伝ってくれるう？」

砂の多そうなところを探していたら、あかねさんの、よく通る声が響いてきた。私はエブロンではっ、とポルンをかくしながら、

「はい」

返事して、ちよつと耳をすましてみた。 うん。

大丈夫みたい。

エブロンのわきからポシエツトを取り出して、そおつとのぞいたら、ああ、やっぱり。

「ごめんね、ポルン」

しゅん、としちゃったポルン。かなしい、さびしい

思いが、私の胸に広がってゆくわ。

「いつしよ、ポポ？」

でも、あかねさんに呼ばれてるし え？

「ひかり、まだいつしよ、ポポ？」

ポルンの大きな瞳が、私をのぞき込んでるわ。私がうなずいたら、

3 ちっちゃなおもい

「むゝ ならいいポポ。 ひかりといっしょなら、ポルンはいいポゝポゝ」

耳をばたばた動かしながらそう言つて、ポシエツトの中に引つ込んでしまった。

あとに残つたのは、あつたかい思い。ちよつとだけさびしいけど、明日を信じてる、あつたかさ。

「いっしょに、がまん。ね？」

ぴよこ、つて動いたポシエツトを両手でそつと包みながら、私は車に戻つていった。

「うゝ、んんゝゝ」

まだちよつとだけ寒い朝の空気。その中で、私は思いつき伸びをした。

お日さまは、まだ公園の端からちよつと顔出したくらい。

さあ、学校に行く前に、車の周りをそつじしよつ。

そのついでに まだ人もいないし、昨日の分まで遊んであげよつ。

昨日の夜は、私の枕の近くでときどき跳ねていたものね。『まだ夜ポポ？』なんて言いながら。

「ポルン、おはよう」

おなかのポケット、ちよつと開いたら、コンパクトが楽しいくらいに飛び上がつて あら？

「あゝ、ひゝかりポゝポゝ」

飛び上がつてこない。それに、聞いたことのないような声 ？

なんだか、胸のあたりがざわざわするわ。

「ポルン？ どうしたの？」

「んゝ、なんだか、すごく ポポゝ」

なに？ ど、どうしたんだろう？ ひよつとして、なにかの病気なの？

ああ、こんなこと、あかねさんには聞けないし、いつも助けてくれる声も聞こえてこないし、ほかに考えていたら、ぱつ、と目の前に顔が浮かんだ。茶

色の髪の、あのひと。

なぎささん！ そうだ、なぎささんたちなら、
なにか知ってるかも！

「ひかり、おはよ！」

教室に入ったところで、何人が声をかけてきてる。

私も、おはよう、って声だけ返して、またカバンの脇をのぞいた。

朝から、これで何度目だろう？ ポルンは、ポシエツトの中。ずーっと、そう。 あら？ ポシエツト

が、ぴくっ、って動いた？

「ポルン？ だいじょうぶ？」

「ひかり、ポロって、なに？」

ひゃっ、って思わず声出して頭をあげたら、そこに顔があった。

「え、と、ううん。なんでも、なんでもない」

ぱっ、とポシエツトを手の中にかくして首を振った。その先に、また顔がひとつ。

「ひかりい、なにか困ってるんだったら、相談に乗るよ？」

私の周りに、人が集まってきてる。

どうしたんだろっ？ いつもだったら、困ってもなんとなく終わっちゃうのに、今日はみんな、離れてくれないわ。ああ、ポルンのこと、見つかったら

「い、いいのっ!!」

自分の出した声にびっくりしたけど、もう気にしていられない。私はポルンをにぎったまま、教室のドアにむかって駆け出した。

早く！ なぎささんと、ほのかさんのところ、早く行かなくちゃ

「九条さん、どこ行くの！ 授業ですよ！」

ドアから出ようとしたところで、私は動けなくなつた。ちようどやってきた先生に、肩をつかまれちゃ

って

私はしかたなく、そのまま席についた。

腰のベルトにつけなおしたポシェット、また、動いてくれなくなっちゃった

「きりいーつ、礼！」

授業終わりの礼をしながら、私はカバンを手に取った。

「ひつかり、これから って、ちよつとあ？」
なにか私の名前を呼ぶ声があるけど、そのまま走って教室を出た。授業の合間間は短すぎて、お昼休みは3年の教室にいなくて、なぎささんたちと、まだ会えてないんだもの。急がなくなちゃ。

だって、ポルンはまだポシェットから出てこないんだもの！

どこにいるだろう？ ふたりとも、部長さんだつて言つてたから、部室かしら。

ここから一番近いのは

うっすら、お薬の匂いにする部屋に近づいたら、音楽が聞こえてきた。

理科室の中から、鼻歌？

とびらの外から、そおつと覗き込んでみたら、白衣がおどつてた。

たっくさんの、ガラスの器具に囲まれた、ほのかさ
ん。でも、入ろうと思つたのに、足が動かない。
ほのかさん、ガラスをひとつひとつ手にとつて、布
でふいて、にっこり笑つてる。誰もいない理科室の
中で、ひとりで、ガラスをふいて、笑つてる

「ん？ だあれ？」

いきなり、白衣姿が近づいてきて、とびらがガラッと開いた。その瞬間、私は思わずうっかの反対側に

はりついちゃった。

「あ、あら？ ひかりさん、どこ行くの!？」

ほのかさんの声を振り切って、私はそのまま理科室を逃げ出した。

やっぱり、なぎささんに相談しよう。

私は走りながら、頭の中でつぶやいた。

そう。ほのかさんは、なんとなく、なんとなくなんだけど、危ない気がするから

ラクロス部のとびらの前に来てから、もう何分もたってる。

なぎささんは、部長さんなんだ。いきなり1年が会いに来たりしたら、どう思われるだろう？ そう考えたら、どうしても手が止まっちゃう。でも

ポルンが。ポルンのため、だったら !

コン コン

「はーい、なんですって、ひかりじゃない。どうしたの？」

あ、同じクラスの子。ちょっとだけ、ほっとしたけど、ポルンだけはかくさなくっちゃ。

「あ、なぎささん」

「？ ああ。ひかり、キャプテンの知り合いなんだよね。ちょっと待ってて。」

なぎさキャプテン

部室の奥に向かって、声をかけてくれたら、

「あいよーっ」

声と一緒に、茶色の髪がびよこん、と出てきた。

「なぎさなぎさなぎさあ。その返事、なんとかならないのあ？」

「いいじゃん、別にさあ」

「男の目の前で言っちゃっても、知らないよ？」

ラクロス部の人たちの間、すり抜けるたびに、な

7 ちっちゃなおもい

んだか色々文句を言われてる。なのに、みんな笑ってる。 どうして？

「だ〜っもっ、うるさいっっ！

ああ、ごめん。おまたせ っ、ひかり？」

「あ、あの あの」

手の中のポルンをにぎりながら、私は言葉が出なかった。なんて言ったらいいんだろう。こんな、いっぱいの人の中で え？

考えていたら、体が勝手に動いてた。

「莉奈、志穂。悪いんだけど、軽くていいから、始めてくれる？」

うっん。動いてるんじゃないかと なぎさん、私

の肩持って、そのまま引きずってる？

「かわいい新入生、食べちゃだめだよ」

「誰がするかっ!!」

部屋の中からまた、笑いながらの声がして、なぎささんも笑いながらどなって 私、食べられちゃうの？

「あの 私、おいしくないです。多分」

言ったとたんに、なぎささんの手が、背中せんぶを押してきた。

「あんたは、黙って歩くっ!!」

背中からすごい笑い声が聞こえてくるけど、なにが、あつたのかな？

引きずられるまま、歩いていった。校舎の中、さっきの道を逆にたどって っっていうことは。

「さーさ、入った入った」

とびらを開けたら、奥には白衣姿のほのかさん。また、理科室に戻ってきちゃった。

「ほのかあ、今日の化学部って、ほのかだけだったよね。ちよつとジャマさせて」

そう言いながら、私の背中を押してるわ。 ああ、目の前まで来ちゃった。

「いらっしやい。さっき、きてたわよね?」

ガラスの器具の山の中で、ほのかさんが笑ってる。さっき、ガラスをふいてたときと、同じ笑顔で。ちょっと、怖いけど。私は、ポルンのいるポシエットを差し出してみた。

「朝から、ほとんど動かないんです。声をかけても、ぼあっとして」

ほのかさん、ポシエットを横からのぞき込んでる。それだけでわかるのかしら? それくらい、私も何度もやってるのに

「ああ、それ?」

そう思っていたら、なぎささんが、私の背中越しにポルンのポシエット持っていた。振り向いてみてみたら ええっ!?

「ほあら、ポルン! 起きなつて。もうお昼すぎてるよっ!」

呼びかけながら、逆さにして振ってるっ!?

「な、な、なぎささん! なにを!」

私が止めようとしたら、後ろから腕を押さえられ

ちゃった。ほのかさんまで!?

「ん? ポルンさ、たまに寝ぼけるんだよ。まだ子供だからね」

ああ、ポルンが! ポルンが!!

背中から、『だいじょうぶだよ』なんて声が聞こえるけど、なんでそんなこと言えるの!? ポルンは、私の一番大事なっ!!

「ん」なぎさ、うるさいポポオ」

思わず叫びだしそうになったとき、ポルンの声が聞こえてきた。ぼあっとしてるけど、いつもの、声。

「うるさいから、男の子にもてないポ」

逆さのポシエットから、頭だけがぴょこっ、と出てきてる。ああ、ポルンっ!

「なんだつてえっつ!? って、え?」

私は思いつきり腕を振りほどいて、そのままポルンに抱きついた。

頬に当たる、ぱたぱたしたこの感じ。1日ぶりの、

ポルンの耳 心

「さーて、感動の再会が終わったところで、なんだけどさ」

頭の上のほうから声が聞こえてきたのと一緒に、私の体も持ち上がった。

そっか。なぎささんの腕ごと、ポルン抱きしめていたんだわ。

そあつと、顔を上げたら、体が勝手に離れようとしちゃう。なぎささんの目、すごく、怖い。

「ひかりい、あんたとクラスが同じ部員から聞いたわよ。今日は、やたら無愛想なんだって？」

ぶあいそうって ええと、笑ってないこと、だったかしら？

「ちよ、ちよっとなぎさ、落ち着いて」

「いや、言わせてもらっわ。あたしらならともか

く、心配してる普通の友だち邪険にするなんてさ」

当たり前だわ。私は、ポルンが心配だったのだから。あ、あら？ い、痛い!？」

「い い？」

なぎささんの指が、目の前に来てる。ゆびで、なにをしたの？

「どーよ？」

「あの、えつと い、いたい、です??」

私はただ、それだけしか言えなかった。

「あたり前でしょ。小突いたんだから」

指で、突いたから、痛い…うん。でも、なんで？ どうして？

「わかれないと、もっかい小突くかね」

ほのかさんの顔も見たけど、私を、ただじっと見つめてるだけ。ふたりとも、何を怒ってるの？ 私がぶあいそうだから？ でも

「ポルンが心配だった。だから、ぶあいそうだった。それが、いけない？」

パンツ！

すごい音が、理科室中に響いた。なぎささんが、机を叩いたんだ。

「あんたは、友だちに心配かけて、それでいいと思ってるの!?」

怖い。両手で自分の体をかかえても、やっぱり震えてきちゃう。ポルン　　！

「だめポポ！　ひかりいじめちゃだめポポ!!」

ああ、ポルン！

ポルンが変身して、なぎささんの顔に、はりついでくれたわ。　でも、すぐ引きはがされちゃう。ポルン！

「やめて！　ポルンに痛いことしたら、なぎささんでも許さない！」

ポルンは　ポルンは私の、たったひとりのお友だちなんだからあつっ!!」

叫んだ。叫んじやった。自分でも、驚くくらい大き

な声で。でも、これが本当。私の、本当の気持ち

あら？

静かに、なっちゃった？

そおつと、顔を上げたら、ポルンが私の胸に飛び込んできた。受け止めて、なでてあげてる私を、なぎささんたちが並んで見てる　ふたりで、ときどき見つめあいながら　　？

「あつっ！　もつ、決めたっつ!!」

ポルンの耳をなでながら、ふたりの様子をながめてたら、なぎささんがいきなり両手振り上げたわ。

「なぎさ、なに　!?」

「決めた。もー決めたっ！　ひかり、あんた友だち。

決定！」

ええっ!?

思わず、きよとんとしちゃう。目を横にずらした

ら、ほのかさんも同じような顔で見てるわ。いったい、なんの話？

「だからさあ、女王さまだとか、いのちだとか、そういうこと考えるからいけないのよ！」

変身したら、そりゃ別だけどさ。ふつうの姿のときは、友だち！ ルミナスもプリキュアもなしっ！！いいね？」

あ、きよとんとしてたほのかさんが、いきなりにつこり笑って、

「ひとりづつでいいよ。友だち、増やそ。ね？」

私に向かって、右手を差し出してる。そおっと出してみた私の手、あつたかくつつまれたわ。やわらかい手と、すこしだけ硬い手に。

「は はい」

「よおし！ そんじゃ、友だちになった記念。あかねさんとこ行って、お祝いしようか。」

友だちだから、たこやきおごってくれるよね
痛っ、いたたたたっ！！

ああ、私に近づいてきた顔が、ふっ、と遠ざかったと思ったら。なぎささんの耳、ほのかさんが引張ってたんだけわ。

「調子にのりすぎよ。な・ぎ・さ？」

ふたりが一緒になって笑ってるの、私はなんだか気持ちよく見えた。頭によじ登ってきた、ポルンと一緒に。

友だちって 多いほうがいいのかもしれない

—おしまい—